

# 箕手久保遺跡

御射山地区県営畠地帶総合土地改  
良事業に伴う緊急発掘調査報告書

1987.3

長野県原村教育委員会

## 序

このたび「箕手久保遺跡」の発掘調査報告書を刊行することになりました。こうした発掘のたびに私どもは、現在私達が居住し毎日の生活を営んでいるこの原村の地すでに数千年の昔、厳しい自然環境とたたかいつながら生活し文化を創造した先人の姿を想像し、感動を覚えるとともに、そのすばらしい足跡を学べることに大きな喜びを感じるものであります。そしてこうした遺跡、遺物を眼のあたりにして先人の文化遺産を大切にするとともに、後世に継承する責任を強く感じるものであります。

このたびの発掘にあたり、諏訪地方事務所土地改良課の方々の御配慮をはじめとして、長野県教育委員会の御指導、そして地元の県営畑地帯総合土地改良事業御射山地区実行委員会の皆様、地権者の方々、発掘に携わっていただいた皆様方など多くの方々の御好意、御尽力に深く謝意を表する次第であります。

また調査報告書刊行に至る過程においてお世話をいただいた関係各位に対して厚く御礼申し上げます。

昭和62年3月15日

原村教育委員会

教育長 平林 太尾

## 例　　言

1. 本報告は、「県営畑地帯総合土地改良事業御射山地区」に先立って実施した、長野県諏訪郡原村中新田に所在する箕手久保遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、諏訪地方事務所の委託と、国庫および県費から発掘調査費補助金交付を受けた原村教育委員会が、昭和61年7月23日から29日にかけて実施した。整理作業は、昭和62年1月21・22日に行った。
3. 執筆は、1・2・3・5・6・7を平出一治、4を伊藤証が行い、図面の作図とトレイスは平出・平林とし美、拓本は平林・柳沢永子、写真撮影と攝影は平出が行った。
4. 本調査の出土遺物、記録等はすべて原村教育委員会で保管している。  
なお、本調査関係の資料には、85の原村遺跡番号を表記した。

発掘調査から報告書作成にわたって、長野県教育委員会文化課指導主事小林学・太田喜幸・芦部公一、井戸尻考古館の武藤雄六・小林公明の諸氏に御助言・御指導をいただいた。厚く御礼申し上げる。

表紙地図10,000分の1 ○印が箕手久保遺跡

## 1 発掘調査に至る経過

昭和59年度から実施されている「県営畠地帯総合土地改良事業御射山地区」も3年目をむかえる。すでに、昭和59年度は花表原・中御射山西・中御射山東の3遺跡を、昭和60年度には御射山遺跡の緊急発掘調査を実施してきた。そして、昭和61年度工事予定地域内には箕手久保遺跡(原村遺跡番号85)が所在していることから、その保護については、昭和60年9月6日に行われた長野県教育委員会の「昭和61年度実施予定の農業基盤整備事業等に係る埋蔵文化財保護協議」で協議された。出席者は長野県教育委員会文化課・南信土地改良事務所(昭和61年4月から諏訪地方事務所土地改良課)・原村役場農林課・原村教育委員会の4者であった。

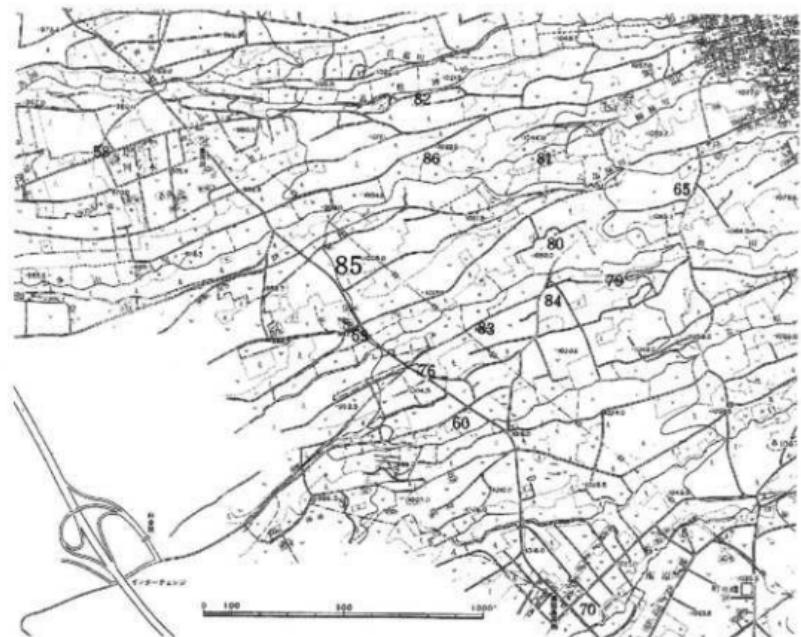
その後、地元に対する説明と協議を行い、原村教育委員会は、諏訪地方事務所から緊急発掘調査の委託を、また、農家負担分については国庫および県費から発掘調査補助金交付をうけて、昭和61年7月22日から29日にわたり、箕手久保遺跡緊急発掘調査を実施した。



第1図 箕手久保遺跡遠景

表1 箕手久保遺跡と付近の遺跡一覧

番号	遺跡名	旧石器	縄文					弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考
			草	早	前	中	後							
58	判の木									○				
59	御射山北									○				
60	浅間沢		○											
65	梨の木沢									○				
70	南原西		○		○						○			
76	御射山		○		○	○					○	○	○	昭和59・60年度発掘調査
79	中御射山東					○								昭和59年度発掘調査
80	御射山沢				○									
81	堤之尾根		○		○									
82	前沢				○					○				
83	花表原					○								昭和59年度発掘調査
84	中御射山西				○					○	○			昭和59年度発掘調査
85	箕手久保				○					○				昭和61年度発掘調査
86	判の木東			○										昭和62年度発掘調査予定



第2図 箕手久保遺跡の位置と付近の遺跡 (1:20,000)

## 2 遺跡の位置と環境

箕手久保遺跡は、中新田区の西方約1.5km、中央自動車道の諫訪南インター東北方約1.2km付近に位置する。

この付近一帯は、諫訪神社上社が執り行う年4度の御狩の神事のなかで最も大掛かりな「御射山御狩」の祭場にあたり、現在は民有地となっているが、明治時代までは御射山神社の社地であったと伝えられている。したがって、付近には「御射山御狩」の祭事を物語るような地名が数多くみられる。

遺跡は、金山沢川左岸のやせ尾根に挟まれているが、平坦地は「箕手久保」、東南方のやせ尾根は「箕手」と呼ばれているように、その形状がちょうど農具の「箕」の形に似ていることから由来した地名のようである。調査の結果「諫訪神社信仰関係遺跡」の一つであることが判ったことはいうものの、「箕手久保」は前記のとおり、御射山御狩を物語る地名とは性格が違うようである。

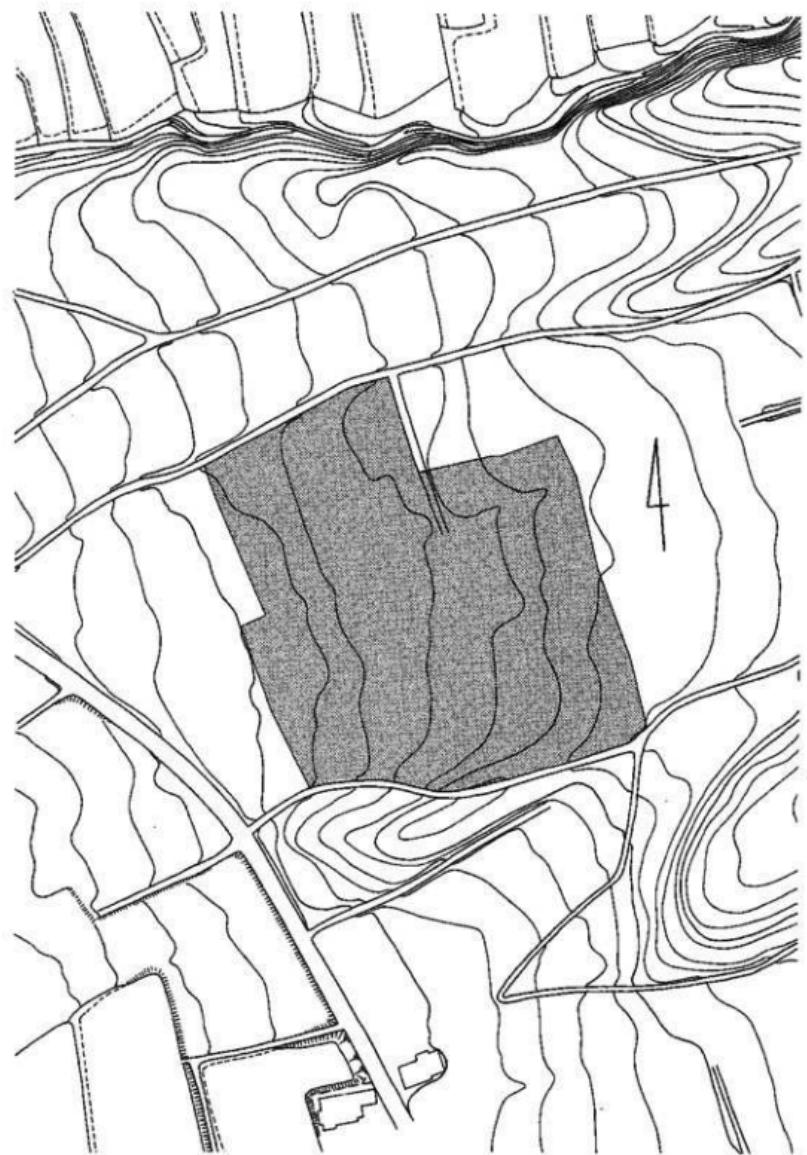
標高は1005m前後を示し、地目は普通畠であるが、箕の形に似ている窪地状地形に立地していることから、集落跡としての条件は良くないようである。長雨ともなれば多量の雨水の道となり、地表面に数多い地山礫が散乱している。遺跡内には礫を拾い集めた結果できた大きな山(ヤツカ)が數箇所みられる。

本遺跡が確認されたのは古いことではなく、昭和59年度に村教育委員会で実施した「県営畑地帯総合土地改良事業御射山地区における埋蔵文化財緊急分布調査」の折に、土師器の小破片4点を採集したことにより注意されはじめた遺跡である。

## 3 グリッドの設定と調査方法

発掘に先立ち、東西南北に軸を合わせたグリッドを設定した。東西方向には50mの大地区を設け、西からA区・B区・C区・D区というようにアルファベットを用いて地区割りをした。大地区の中をさらに $2 \times 2$ mの小地区(グリッド)に分割し、東西方向は西からA~Yのごとく区分した。南北方向には算用数字をふったが、事前に実施した表面採集の成果を参考に、遺跡の中心と思われるラインを51とし、そのラインを基準に南方向は50・49・48というように南に行くにしたがい小さくなるように、北方向は52・53・54と大きくなるように振分けた。

個々のグリッドの呼びかたは、たとえば第4図左上方の $2 \times 2$ mの発掘グリッドでみると、大地区はB区であり、小地区の東西方向はAラインにあたり、南北方向が65ラインで、それは「A-

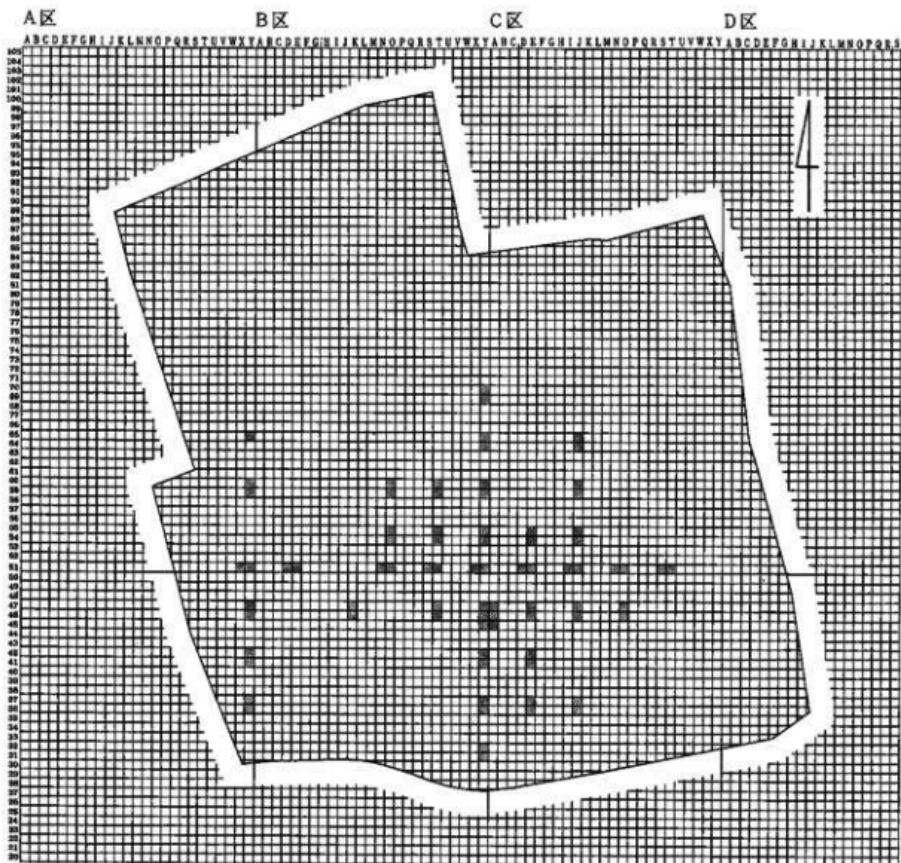


第3図 笠手久保遺跡発掘調査区域図・地形図（1：2,000）

65」となる。したがって小地区の前に大地区を表記した「BA-65」となる。

発掘は、調査対象範囲に2グリッド(2×4m)を1単位としたグリッド平面発掘を層位別に行った。遺物の出土状態によって発掘調査グリッドが密になるところと、そうでないところがある。グリッド発掘は原則としてソフトローム層上面まで行った。

#### 4 発掘調査の経過



第4図 グリッド配置図

- 昭和61年7月21日 発掘調査の準備を始める。
- 7月24日 調査開始にあたり教育次長の挨拶のあと、グリッドの設定をし、作業を始める。B区とC区のいくつかのグリッドから土師質土器片とBY-46のグリッドから縄文土器片、CJ-37のグリッドから石鎌が出土する。
- 7月25日 B区とC区の発掘作業を行う。B、C両区のいくつかのグリッドから土師質土器とBY-45、BY-46、CA-45、CA-46の各グリッドから縄文土器片、BY-47のグリッドから打製石斧が出土する。II、III層中に礫を数多く包含するが、自然流出によるものと思われ集石遺構に伴うものではない。
- 7月28日 引き続きB区、C区のグリッド発掘を行う。いくつかのグリッドから土師質土器とBY-45、BY-46、CA-45、CA-46のそれぞれのグリッドから縄文土器片が出土する。遺構を検出する事はできなかった。
- 7月29日 グリッド枕、機材等の片付けを行う。

## 5 発掘の状況と土層

第4図のグリッド配置図に示したように、81グリッド324m<sup>2</sup>の平面発掘を層位別に実施したが、出土した遺物は少なく、遺構を検出するまでにはいたっていない。

本遺跡における層序は、平地（低地）と斜面では違いがみられたが、基本的には次のとおりである。おおまかな観察結果を記しておきたい。

第一層 黒褐色土層 煙の耕作土層で13~15cmの厚さである。南北方向の45ラインより北側（平地）では、小礫が数多く含まれている。遺跡の位置と環境で記したように、ヤツカのあり方からみて、耕作のさまたげとなる大きな礫は拾い出されているのであろう。

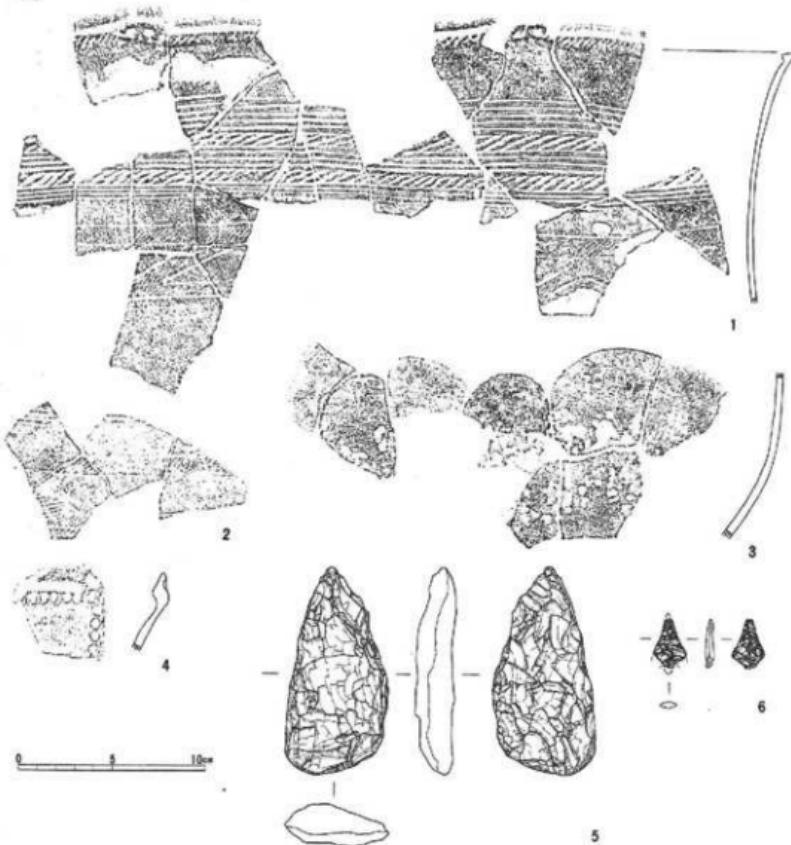
第二層 黒色土層 第I層よりしまっている。グリッドによって厚さはまちまちで10~30cmを計る。やはり円礫を含むグリッドがあり、それは第I層同様に45ラインより北側に多い。第I層からも遺物は出土しているが、基本的には、この土層の上半部が中世の遺物包含層である。

第三層 磁混入茶褐色土層 平地では子供の握り拳大から頭大の円礫を多量に含む。45ラインより南の斜面ではこの層は認められない。この土層上半分で縄文時代の遺物が出土した。これより下層では遺物は発見されなかった。

第四層 ローム漸移層 45ライン南側の斜面で認められた。

第V層 ソフトローム層 斜面では明確に認められたが、平地では握り拳大より小さな角礫を含むグリッドが多く、ソフトローム層と呼んでよいのかわからない状態である。

発掘区全体では、礫の包含されているグリッドは多かったが、そのあり方は遺構として把握できるような規則性は認められなかった。中でも、45~55ライン付近には数多い礫が包含されていた。地山である小礫混入のソフトローム層を観察すると、この付近が一番低くて溝状になっているうえに、僅かではあるが砂層が認められた箇所もあることから、雨水によって洗い出されたものと思われる。現在でも大雨の時などには、多量の水の流れ道となることからも頷けることである。



第5図 繩文時代の土器拓影と石器実測図 (1:3)

## 6 遺 物

発掘調査の結果、縄文時代と中世の遺物が発見された。これらの遺物を時代別に分類し若干の考察を加えてみたい。

### (1) 縄文時代の遺物

発見した遺物は土器と石器がある。

土器は破片ばかり60点、その内57点は同個体の破片である。BY-45、BY-46、CA-45、CA-46の4グリッドにわたる径180cm位の範囲内において、第II層下半から第III層上半の疊の間から疊らに出土したもので(第8図)、原形を止めた状態ではなかった。

石器は打製石斧1点・石鎌1点と少ない。

#### 土 器

土器は全て後期前葉、壇の内II式の精製土器に類別されるものである。

第5図1~3は同個体の破片57点の内30点を示した。破片数が少なく完形復原することはできないが深鉢である。口縁部外面は葉文で、口縁端部は尖り薄くなる。口唇部には、その単位は不明であるがいわゆる8の字状の小突起が横位に付けられ、その間は等間隔の刻文で飾られている。内面には横走する1条の凹線が施されている。外面頸部は上から5条の凹線文・等間隔の斜状凹線文・4条の凹線文・等間隔の斜状凹線文・4条の凹線文と繰り返されているが、このような施文はあまり見られない手法であろう。無文帯をはさみ胴部には磨消縄文が施されているが、基本的には横位の構成である。下調部は無文である。胎土は非常に密で整形・焼成とも良い。器壁外面の頸部付近と内面の調下半部には炭化物の付着がみられる。

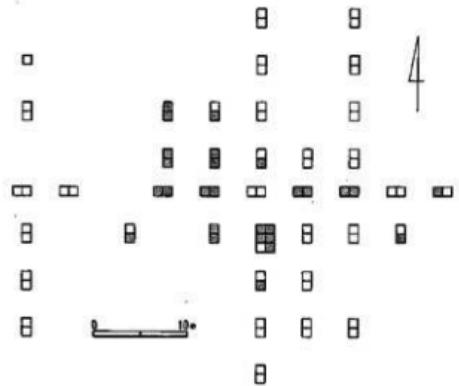
4は、口縁端部は尖り、内面は折り返し口縁状に整形された小突起を持つ口縁部破片である。突起部直下には円形の刺突文を有しているが、たぶん2穴が並んでいるものと思われる。そこから刻みを入れた凸帯が垂下している。また、刺突文を基点に1条の凹線がめぐり、その直下にはやはり刻みを入れた凸帯が平行している。胎土・焼成とも良い。

#### 石 器

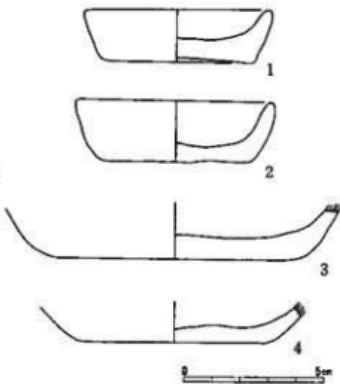
第5図5は緑色岩製の打製石斧で、当地方に一般的にみられるものである。刃部の磨滅は著しい。6は黒曜石製の3本脚といわれる凹基有茎石鎌であるが、脚部と茎部を欠損している。

### (2) 中世の遺物

発見した遺物は、土師質土器片243点で、4点が器形復原できた他は全て小破片である。多くは第II層出土であるが、わずかに第I層から出土したものと表面採集したものとがある。



第6図 土師質土器出土グリッド（調出土グリッド）



第7図 土師質土器実測図（1：3）

### 土 器

第7図の4点と小破片がある。調整・成形とも土師質土器としては良い方である。これは図示した4点をはじめ、糸切底の認められる底部破片が数点あることから、輪轂整形によるためと思われる。焼成は普通で色調は赤褐色である。大きさは、図示した1・2は小さいが、3は大きいというよう規格性はみられない。他は小破片ばかりで明確な大きさはわからないが、1・2よりは大きく3よりは小さいものが多いようである。

## 7 結 語

本遺跡で発見した資料は縄文時代・中世とも少なかったが、この事実が箕手久保遺跡の性格を物語ることになるのである。時代別に若干の考察を加えてみたい。

### 縄文時代

土器片の発見により、この地が縄文後期の人々の生活行動範囲の内、いい換えるならば、生産活動の場の一端であったことをうかがい知ることができた。しかし、当時の人たちが居を構えて生活した遺跡ではなかった。

これと同様の例は、中御射山東遺跡と花表原遺跡（昭和59年度発掘調査）・御射山遺跡（昭和60年度発掘調査）でもみられた。また、中央自動車道の建設に伴って発掘調査された手洗沢・御射山西・頭殿沢・御狩野・金山沢北・判の木山東・判の木山西遺跡でも、遺物の量に違いはあるが同様である。それらは本遺跡をふくめ径2.5kmの範囲内に所在していることから、この付近一帯は、当時

の人たちが生活の舞台にしていたということが明らかである。しかし、未だその人々が居を構えた地、すなわち集落遺跡の所在を明確にすることはできないでいる。

これが当地方における縄文後期の特色であるのか、それとも付近に大遺跡が眠っているのかを究明する中で、本遺跡の性格付をしなくてはならないだろう。

### 中世

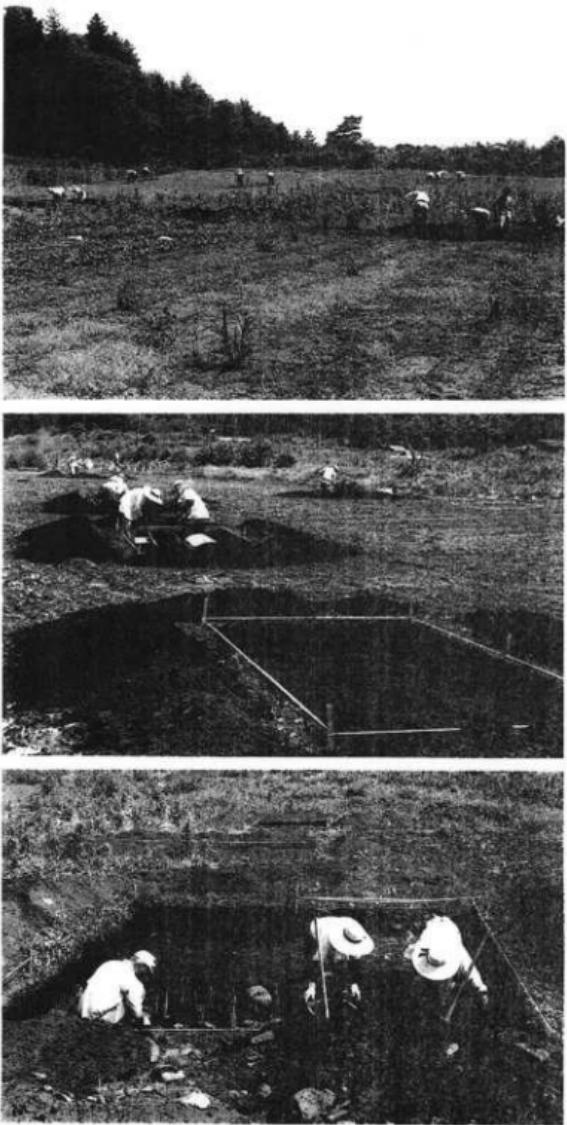
発掘調査前は平安時代の遺跡と考えられていたが、調査が進む過程で中世の遺跡であることが確認された。これは、短期間で行った分布調査の結果だけで、安易に遺跡の性格付をした欠陥であったと思う。

発見した資料はやはり少なく、それも全て土師質土器の小破片であった。御射山遺跡の報告でも述べたことであるが、土師質土器が小破片である点は、人為的な破碎も考えられ、御射山祭(祭祀)の性格を究明する手掛かりの一つになるかもしれない。ただ、青磁片が1点もなかったことが、本遺跡と御射山遺跡との違いである。これを、御射山祭に集まつた人たちの身分の差と安易に考えてよいのかわからないが、いずれにしても、この地も御射山御狩の祭場の一端であったことが明確になったといえよう。

最後に、関係者各位ならびに発掘調査にたずさわった方々に厚く御礼申し上げる次第である。

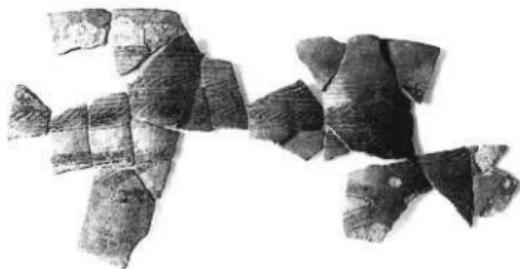
### 参考文献

- 1979. 03 日本道路公团名古屋建設局・長野県教育委員会 『昭和51年度 長野県中央道埋蔵地発掘調査報告書 茅野市・原村その2』
- 1980. 03 長野県教育委員会 『昭和54年度 八ヶ岳西南麓遺跡群分布調査報告書』
- 1981. 03 日本道路公团名古屋建設局・長野県教育委員会 『昭和51・52年度 長野県中央自動車道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 茅野市・原村その3』
- 1981. 03 日本道路公团名古屋建設局・長野県教育委員会 『昭和51・53年度 長野県中央自動車道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 茅野市その4・富士見町その3』
- 1985. 03 原村教育委員会 『花表原・中御射山西・中御射山東遺跡 県営畑地帯総合土地改良事業御射山地区埋蔵文化財包蔵地緊急試掘調査報告書』
- 1985. 07 原村役場 『原村誌 上巻』
- 1986. 03 原村教育委員会 『御射山遺跡(第2次発掘調査) 御射山地区県営畑地帯総合土地改良事業に伴う緊急発掘調査報告書』

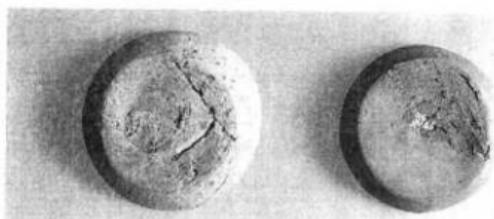
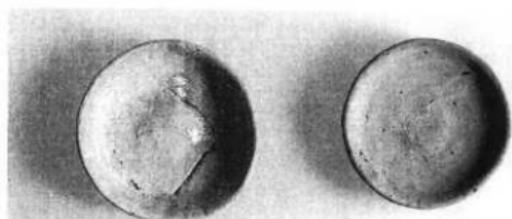


縄文土器出土グリッド

第8図 発掘風景



縄文土器



土師質土器

第9図 出土土器

発掘調査団名簿

団 者 平林太尾（原村教育委員会教育長）

調査担当者 平出一治（原村教育委員会）

調査員 伊藤 証（原村教育委員会）

調査補助員 平林とし美

調査参加者 行田末平 菊池利光 鎌倉長重 今泉かめ子 五味かずみ 阿部よし子 五味としあ 宮坂とし子 藤原智恵子 小林静子 中村よしの 真道ふき 津金一江 白鳥すみえ 小池一二三

整理参加者 平林とし美 柳沢永子 宮坂とし子 藤原智恵子（順不同）

事 務 局 原村教育委員会事務局 — 行田竹輝（教育次長） 武田伊都子（主任） 近見茂子 佐貢正憲

原村の埋蔵文化財 8

箕 手 久 保 遺 跡

御射山地区県営畠地帯総合土地改良事業に伴う緊急発掘調査報告書

発行日 昭和62年3月

発 行 原村教育委員会  
長野県飯訪郡原村

印刷所 はおづき書籍株式会社